

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號二第 卷十第

行發日一月二年九正大

## 論 說

資本論に見はれたる唯物史観……………法學博士 河上 肇

社會的租稅政策の根本理論……………法學博士 小川郷太郎

鎌倉時代の家族制度(二)……………文學博士 三浦 周行

消費稅が生産者に及ぼす影響の社會政策的考察……………法學博士 神戸 正雄

植民地の土地政策(二、完)……………法學博士 山本美越乃

交通の意義と交通論の問題……………法學士 小島昌太郎

## 時事問題

支那の日貨排斥運動……………法學博士 戸田 海市

## 雜 錄

手形交換所制度論(二)……………法學士 大森 研造

絹に關する外國語……………法學博士 財部 靜治

岡山藩の開墾策(二)…………… 黑 正 巖

絹に關する外國語

財 部 靜 治

本年初頭の大阪毎日新聞は、注目すべき一電報を掲げたり、乃ち邦人某か、北米加州に於て一養蠶所を設立し、本邦の優良蠶種を取寄せたりと、傳へたるは之なり、吾人は今その詳細を知らず、特に養蠶に必要な、桑樹栽培の準備等、如何なる程度迄、積まれつつあるやを、

知らざるか故に、成功の蓋然性に富むこと、幾何なるかを推知し得へき限りに非すと雖も、假りに之か前途、大にその光明に充てりとせんか、本邦經濟の前途を考ふる、見地よりせば素より、一般に世界文明史の發展より察するも、輕卒に看過すへからざる事實なり、特に吾人は本誌上、第十八世紀の中葉、當時の英植民地たりし米大陸に、養蠶を移植せんとするの議を立てし、Pallinの著書を紹介せる、記憶を新たにして、轉た之を想はずんは非るなり(蠶濟眼二九八、二九九頁參照) 吾人は今之を機會とし、近比一讀の機

會を得たる、佛人 Laurent de L'Arbousset の著書英譯 *On Silk and the Silkworm*, tr. by Elizabeth Wardle, 1905 の所説を骨子とし、本短編を草して、かの有名なる支那學者リヒトホーフエンか言へる如く、支那人か絹に付命名せる所は、絹そのものと共に、世界に傳播せるを瞥見し、依りて蠶及絹の東西兩洋交通史、否一般に世界史上に於ける、特殊要度の一端を、窺ふの料に供せんと欲す。

絹は古代人には、當初 *serice* とふ名稱の下に、解せられたり、此纖維を希臘及羅馬に輸入せしめたる、韃靼種族により、かく唱へられたればなり、而して希臘人は、右の語を採用して *serice* と書き、之を語根として、その語尾を種々に變化せしめ、絹に關する諸語を作出したり、希臘人は別に又蠶絲に、*serice* (啼く蟲又は絹の蟲從ひて絹てふ語の延長) とふ名稱を與へたり、されど最も多く使用されたる語は、*ovine* 又は *ovine* たり、かくて *ovine* とてふ語は、成熟せる蟲、換言すれば蠶蛾の形態を占めたる蠶を、示すの用に限られたり。

羅馬人も同様に、韃靼の名稱 Ser の下に、絹を解したり、而して絹に關する、拉丁語の大多數假令は Serica (絹の國、絹の若物) Sericatus (絹商人及絹織人) Sericum (絹織物、珍らしき絹) の諸語を、生める語根も之なり、尤も此點に付その説に一步を進め、その語源を韃靼語以上に、絹に當る支那語絲 *ssu* に、求むる人あり、乃ち説いて曰く、右の諸拉丁語に關聯して注意すべきは、支那てふ名稱か、右の支那語より轉訛せることなり、古人により支那を呼ふために、用ゐられし一切の名稱は、貴重なる絨維の名稱に、由來したり、乃ち Seres, Tsin, Siam, Sereca 等の他の語は、凡て絹の國を意味したりと、(Cf. L. Hooper, Silk, its Production and Manufacture, Phipps's Common Commercial of Commerce, p. 19 ラインの英譯日本產業論一八七頁にも同様な説明あり) 何れの所説によるも、蠶文明の淵源か、我極東に發するを、語るは一なりと雖も、言語の傳播從ひて又文明波及の跡を、精しからしめんとする立場よりせば、之を區別してその當否を、吟味するの要あり、今單に之を

併記して、後日の精研に備ふ。

その外 Serigene (絹の産出) Serimetre (絹の計量器) Sericulture (養蠶) Sericole (養蠶に關する) 等の諸語引出されたるも、同じ Ser を語源とす、尤も最後の二佛語は、Ser の屬格 Seris より、傳來せられし代りに、虞らくは不正に之を、Sericum の屬格 Seru より、傳來せしめたりとすへきも、伊太利人か Sericultura と書くは、本源の語法に一層よく適合するに似たり。

佛語 *soie* (絹) てふ語そのものは、全くその語源を異にし、拉丁語 *seres* (牡豚の硬毛) より、傳來されたり、原始的絹に應用されたる、右拉丁語によりて察するに、その蠶糸は粗大に製絲せられ、寧ろ毛髮の如きものありしや、滑かにして光澤あるも、極めて強き豚の硬毛に、比較せらるゝにより明かなり、現在の絹は、毛髮の如しとすへき點ありとすも、單にその觸感上、毛髮の如く感せらるゝにより、しか呼び得へきのみ、要するに絹に付ては、その原始的名稱 Ser は、漸次 *soie* に變りつゝあり、唯伊太利人は之

を變化せしめざるも、佛國東南部の一古州人ブ  
ロウエンサルス及西班牙人は、語尾を變化せし  
めて、Sedoと書く、佛人か原語を一層甚しく變  
化せしめ、Seraより Soieを作れるは、Viaより  
Voieを作れると異らす